

# 大人の女性 2

ローリング・ストーンズ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

緑谷出久とマンダレイのほっこりするお話です。

目次

## 大人の女性2

とある休日の午後。

プロヒーローチーム・プツシーキャッツのメンバーの一人であるマ  
ンダレイは、雄英高校に向かっていた。

その目的は、ヒーローの先輩として、とある卵の特訓に付き合うこ  
とになったからだ。

その相手は最近出来た寮の近くにある林の中で、既に一人で特訓を  
始めている。

……相変わらず頑張ってるんだなあ。

初めて会った時は本当に子供に見えたんだけど。

最近会ったばかりなのに、そんな感慨深い思いを抱くほどに、彼女  
は『彼』の事を、親しく思っている。特に最近は、会う度にドキツと  
させられることも……。

……いや、何を考えているのかしら。私は……

マンダレイは頭を振り、妄想を振り払う。そう、今日は先輩として、  
指導者として彼に会うのだから、しっかりしなければ……。

彼女は一人、気合いを入れ直した。

\*\*\*\*\*

「確か、こつちだったわね」

出久から聞いた話を思い出しながら、マンダレイは少し早歩きに約  
束の場所に向かう。

待ち合わせ場所は、新しく建てられた学生寮付近の森だ。

さて、彼は何処にいるのだろうか？

「緑谷く〜ん」

辺りを見回していると、誰かが倒れているのが見えた。

「えっ？み、緑谷君!？」

それが誰だか気づいた彼女は慌てて駆け寄った。

彼を起こさないように頭を動かさず、そっと膝枕をしてあげた。

すると、彼のあどけない笑顔に、つい頬が緩むのを自覚してしまう。

……なんか、この前見た時より凛々しくなってるかも

マンダレイはそつと自分の顔を出久の顔に近づけた……のだが。  
「んん……んん？」

出久がいきなり目を覚ました。  
「っー」

その焦点の合っていない瞳に驚きはしたのだが、マンダレイは何故か動くことができなかった。

「…………え？」  
「……………」

至近距離で視線が絡み合い、物音一つ立てることもできない気まずい沈黙が生まれる。

しかし、それも数秒の事で、本格的に目が覚めた出久はあたふたと慌てだした。

「マ、マンダレイ!?! な、何で!?!」

「こんにちは、デクくん。あはは……びっくりした？」

「そ、それはもう!?! ど、どうしたんですか、いきなり!?!」

「いきなりっていうか……約束通りの時間に来たら、君が疲れて倒れてたから……ね?」

「…………あつーそ、そうでした!?! す、すみません!」

予想外の出来事に、出久は慌てて起きようとするが、マンダレイはそれを優しく押さえた。

「いいわよ。まだ休んでて。また無理してたんでしょ」

「は、はい………すみません」

「ふふっ……………たまにはこういうのもいいかも」  
「えっ?」

「なんでもないわ。それより、休憩終わったら、みっちりしごいてあげるから覚悟しててね」

「……………はいっ」

出久はそのやわらかな大人の微笑みに胸を高鳴るのを感じた。  
だが彼がその理由に気づくのは、もっと先の話である。

\*\*\*\*\*

「お、おい、あれ……!」

「み、緑谷の奴うくく！」